訳者あとがき

本書は、二〇一一年にチョ・ヘジン（趙海珍）が発表した長編小説『ロ・ギワンに会った（로기완을 만났다）』（創批（チャンビ））の全訳である。生き残るという覚悟一つで異郷の地に渡った脱北者の青年ロ・ギワンと、大切な人に取り返しのつかないことをしたという罪悪感に苛（さいな）まれる放送作家キムの姿が、ベルギーのブリュッセルを舞台に描かれている。ギワンの日記をもとに彼の足跡を一つひとつ巡るなかで、その深い孤独や苦しみに思いを馳せるキム。彼女にとってその日々は、ギワンの姿を通じて自分と向き合う旅路だった。

チョ・ヘジンは、二〇二四年に作家デビュー二十年を迎える。デビュー以来一貫して、社会から背を向けられたり、帰属感のないままさまよう人びとの姿を温かいまなざしで見つめてきたことから、〝他者の作家〟と呼ばれてきた。二〇〇四年に中編小説「女に道を訊く」で『文芸中央』新人文学賞を受賞して作家デビューした彼女は、二〇〇八年に、社会から疎外された人びとの心

の痛みを綴った初の作品集『天使たちの都市』（呉華順訳、新泉社）を発表した。そして、二〇一一年に発表した本作『ロ・ギワンに会った』が大きく注目される。この作品は、「現代の人びとが抱える痛みに通ずる物語で、内面を省察する姿を書き上げた」と評され、申東曄文学賞を受賞。さらに、二〇二一年には韓国の公共放送局ＫＢＳと韓国文学評論家協会が共同で選定した「わたしたちの時代の小説」五十選の一つに選ばれ、「今の韓国社会は他人の苦しみにますます無感覚になりつつあるが、この小説からはともに生きることの意味とは何かについて考えさせられる」と評価された。なお、本作は英語版とロシア語版が翻訳出版されており、二〇二四年には本作を原作とした映画『ロ・ギワン』（キム・ヒジン監督、ソン・ジュンギ主演）がオンライン配信で公開される。

主な作品に、希望を失った若者たちの夏の時間を描いた長編小説『夏を通り過ぎる』、歴史的暴力に立ち向かう人びとの姿を追った短編集『光の護衛』（金敬淑訳、彩流社）、フランスに養子に出された女性が自らのルーツを探す旅を描いた長編小説『かけがえのない心』（オ・ヨンア訳、亜紀書房）、壊れゆく世界の片隅で生きる人びとの姿を見つめた短編集『わたしたちに許された未来』などがある。これまでチョ・ヘジンは、若い作家賞、無影文学賞、李孝石文学賞、白信愛文学賞、大山文学賞、東仁文学賞など、名だたる文学賞を受賞しており、現代韓国を代表する作家のひとりとして高く評価されている。彼女の作品が邦訳出版されるのは、本書で四作目になる。

本作の大きなテーマの一つが「他者への憐れみ」である。本作について著者のチョ・ヘジンが、「単純に可哀想だという感情ではなく、真心を込めた、結果的に自分の人生にも影響して何か変化をもたらすような、真摯で純粋な憐れみとは何かと考え、そんな思いを投影した作品」（「KBSニュース」二〇二一年十二月五日のインタビュー）だと語っているように、主人公キムは、自分がギワンやユンジュに抱く感情が偽りのない心からのものなのかと苦悩する。「他者の苦しみは実体が見えず、察することしかできないため、つねに何かが欠けている」（本書一二九頁）ことを日頃から痛感しているキムは、ロ・ギワンについて何かを書く資格が自分にあるのかと自問し続ける。それでも彼女は「今度は彼にもわたしのことを、彼自身が介入しているわたしの人生を知ってもらおう。ギワンがわたしの人生へと歩んできた距離と同じ分、わたしもまた彼に向かって歩んでいくべきなのだ」（一七九―一八〇頁）と心を決めてギワンに会いに行く。表面的ではない心からの憐れみは、どのようにして生まれるのか。どうしたら他者の痛みに寄り添うことができるのか。わたしたちは他者をどのように理解すべきなのか。本作は、キムの苦悩を通じてこのような問いについて深く考えさせてくれる。

チョ・ヘジンは、実際に起きた社会問題や歴史的な事件をテーマにして、国家や権力による暴力に苦しむ人びとの姿を描くことでも知られている。本作では、北朝鮮の状況や脱北者、難民、そして安楽死をめぐる問題などに焦点が当てられているが、彼女が見つめているのはあくまでも

そこで生きている個人の姿である。母国を脱し、中国を経てブリュッセルに渡ったギワンは、「生きるために生きてきただけなのに、故郷を離れて以来ずっと追われ、隠れ続けなければならない犯罪者となり、時には一人の人間として守り通したかったものまで根こそぎ奪われた理不尽な日々」（七八頁）を送り、孤独や不安、貧しさ、周囲からの無視に耐え続けている。ブリュッセルの華やかな街並みを目の当たりにした彼の、「栄養失調で成長が止まった子どもたち、病人のように髪の毛がごっそり抜け落ちた青年たち、……あれは、あの人びとは、幻だったのか。こんなにも豊かな世界の向こうに、信じられないほどの貧しさと飢えにあえぐ大きな共同体が、まぎれもなく一つの国家として存在しているということが信じがたかった」（四二頁）という描写などからもわかるように、北朝鮮での暮らしや脱北者の現実が繊細かつ立体的な筆致で描き出されている。難民の保護や支援を行なうＵＮＨＣＲ（国連難民高等弁務官事務所）の資料によると、二〇二二年に新たに難民認定された北朝鮮出身者は世界十か国に二百六十七人存在し、多い順からドイツ九十一人、ロシア三十七人、イギリス三十五人、カナダ三十三人、ベルギー二十八人と続く。そしてこの資料からはさらに、難民認定されていない北朝鮮出身者も世界各地に数多くいることが推測できる。また、韓国に渡った脱北者の数は累計約三万四千人にのぼるが、人知れず家族や知人のいない寂しさや経済的問題を抱えているケースも多い。本作は、これまであまり目を向けられなかったその一人ひとりの姿に焦点が当てられている点でも非常に意義深いと言えるだろう。

二〇〇九年の秋からおよそ一年間、ポーランドの大学で韓国語を教えていたチョ・ヘジン。外国での暮らしで、異邦人として生きることの不安を身を持って感じていた彼女は、ある日、ベルギーでさまよう脱北者の記事を読んで現地に向かったと言う。この経験をきっかけに、彼女の作品の世界観は大きく変わっていく。デビュー当初は、疎外された主体が大きな苦しみを抱えると、自ら進んで孤立することを選ぶ物語が多かったが、本作を書いていた頃から、絶望を抱えて立ち止まるより、他者とつながろうとする人物に心が動くようになったと話している。

「これまでずっと他者を見つめてきましたが、その視線の方向や質は変わってきたように思います。歳を重ねて、接する人や読む本の範囲が広がるにつれて、絶望するという態度は現実から目をそむけることなのではないかと感じるようになりました。絶望は、何もしなくていいという砦になってくれるからです。作家として、一人の人間として、硬い皮を剝がして外に出て行くべきだと感じていた頃、自分より不安で何も持たない人びとの姿が目に映るようになりました。その中の一人がロ・ギワンのような脱北者です」、「『ロ・ギワンに会った』を書いていた頃から、人と人とのつながりに関心を抱くようになりました」（「チャンネルYES」二〇一九年七月号、二〇二〇年十月号のインタビュー）

本作においても、はじめは出口の見えない深い闇の中にいた登場人物たちが、決してその苦しみに埋もれることなく、人とのつながりのなかで心の傷を修復し、生きる意味を見いだしていく

さまが描かれている。ギワン、キム、パクは、互いの痛みに寄り添い、そして互いの存在によって心が救われていく。このようにチョ・ヘジンは、登場人物たちの痛みを温かいまなざしで包み込み、人と人との関係のなかで新しい道を模索しようとする姿を描くことで、そこから生まれる希望の光を灯している。これこそ、彼女が〝他者の作家〟であるとともに〝光の作家〟と呼ばれる所以だろう。

「他者を知っていくこと、相手を完全に理解できなくても、わたしたちは知ることで互いを照らし合う瞬間を求めているのだと思います。その光によってわたしたちは生かされている、そう信じています」（「KBSニュース」二〇二一年十二月五日のインタビュー）

この世のどこかにいるであろうギワン、キム、パクの姿を思い描いてみる。ひょっとすると彼ら彼女たちは今もつらい思いを抱えているかもしれないし、さらに大変な状況に置かれているかもしれない。それでもきっと目に見えない絆で結ばれていて、離れていても互いのことを思うだけで心が強くなれるのだろう。

明日何が起こるかわからない不安定な世界で、わたしたちはいつの間にか他者の痛みに目をそらすようになったのかもしれない。しかし、著者の言葉のように、いまこそ相手の悲しみや苦しみに耳を傾け、寄り添っていきたい。それがいつの日か、互いを照らすあたたかな光となり、明日を生きる支えとなると信じて。

*

この小説はわたしがおよそ十年前に文学翻訳家を志したとき、いつか自分の手で訳したいと心に誓った作品です。キムの抱く罪悪感や心の葛藤、ギワンの孤独や疎外感が胸に響くとともに、生きることをあきらめない姿、人とのつながりを信じる姿勢に力をもらいました。最後のページを閉じたとき、心が洗われるような感覚を抱いたことを鮮明に覚えています。

本書の翻訳・出版にあたり、多くの方にお世話になりました。温かい励ましの言葉とともに訳者からの質問に丁寧に答えてくださったチョ・ヘジンさん、感謝の気持ちでいっぱいです。そして、チョ・ヘジン作品を心から愛し、親身になって根気強く編集にあたってくださった新泉社の安喜健人さん、何度も背中を押してくださった翻訳家のオ・ヨンアさんとカン・バンファさん、翻訳仲間として貴重な意見を寄せてくれたアン・ミンヒさんに心からの謝意を表します。

なお、翻訳刊行にあたっては韓国文学翻訳院のご支援をいただきました。重ねて感謝申し上げます。

二〇二三年初冬

浅田絵美